世界の文学

22

ヨーンゾン

集英社版 世界の文学 22

ヨーンゾン

集英社

DAS DRITTE BUCH ÜBER ACHIM
by Uwe Johnson
Copyright © 1961 Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main
ZWEI ANSICHTEN
by Uwe Johnson
Copyright © 1965 Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main
Japanese translation rights arranged through Orion Press, Tokyo

© 1977 Shueisha

集英社版世界の文学22
ヨーンゾン
一九七七年四月二〇日印刷
一九七七年五月二〇日発行
訳者　藤本淳雄／大久保健治
編集　株式会社綜合社
一〇一　東京都千代田区神田神保町三―六―五
電話（〇三）二三九―三八一一
発行者　堀内末男
発行所　株式会社集英社
一〇一　東京都千代田区一ッ橋二―五―一〇
電話　出版部（〇三）二三〇―六三六一
販売部（〇三）二三〇―六一七一
印刷所　中央精版印刷株式会社
大日本印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします
定価は帯に表示されています
0397-122022-3041

目次

三冊目のアヒム伝　藤本淳雄訳　3
二つの風景　大久保健治訳　253
解説　藤本淳雄　401
著作年表　413

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

三冊目のアヒム伝

そこでぼくはあっさりきっぱりとこう始めようと考えた――彼女がかれに電話をかけてきた、句読点でひと休みする、それから自明のことのように付け加える――境界を越えて、と、きみがびっくりしてそしてわかるようなつもりになるようにだ。小心に（しょっぱなからあやふやなところを見せるのをぼくは好まない）ぼくは五十年代のドイツの中には国境が存在したと補足せざるをえない。ごらんのとおりこの二つ目の文は最初のと並べるのはどうにもしっくりしない。にも拘らずできることならぼくはこの境界が長くて海岸の手前三マイルで快速艇の疾駆するところから始まっていることを記述するだろう、若い男たちがそれを望遠鏡に捉えている、実弾を装塡された大砲は鉄条網まで射程が及び、その鉄条網はバルト海のなごやかな波打際まで延びている、一方の側の幾多の孤立した村々では他方の側のリューベク（境界に近い西ドイツの古い町）の教会の塔が望まれた、十メートルの幅で鋤き起されてコントロール地帯が特別に伐採された森の中まで押し入っており、荷車道や足が踏み拓いた小径は沈下してしまってはびこる草に蔽われている、あるいは花盛りの木苺の蔓をその上に垂れ下がらせることにするか、まあそんな情景を結局のところきみは想定していいわけだ。それからぼくは道路をレールを空中をとおっての交通がそれぞれに経験する境界越えを記述していたはずだ――きみが一方と他方の検問でなにを言わねばならないかを（そして人がきみになにを言うか）、いかにそれぞれのバラックが違って見えるかを、そして哨兵が似てもつかぬ挨拶をするかを、そしてよその国の国体のおっかない感情を、この感情にはカルシュでさえ中間地帯を車で越えるときにとっつかれたものだ、かれはすでに幾度となくよその国々にその言語すら持ち合せることなく行ったことがあったにも拘らずだ。しかしこの男もその容貌もその旅の理由もこれまでのところは土塁のところや壕の中や壁の前での道路の天然のごとく唐突な切断ほどに重要ではない。認めるよ――ぼくは正確さの問題で困っているのだ。ぼくの言うのは十メートルなどという数字のことではない、それは雪の下とか、あるいはまた、引き裂かれた大地から雑草の芽の緑の和毛を取り出す、あの最初の日溜りの下では七メートルということもありうるだろうよ、ぼくの言うの

はこうだ――大地は、足取りが識別可能で追跡することができて、さらに停止させられるに充分なだけの幅を疎かしておくことになっている。だからといってぼくから、冷たい朝霧の中を猛然と疾駆してゆく人影の名前や生活環境や、その足下に飛び跳ねる濡れた細かい土くれを期待しないでくれたまえ、またしても静かな森の末端が人間の跳躍の下で引き裂け、懸命に愚かしく犬の吠える声、職務質問の誰何、喘ぐ呼吸、銃声一発、思いもかけずだれかがばたりと倒れる、そんなつもりがぼくになかったのは、その狙撃者だって自分の一生の終るころにはそんなことを主張しないのが一番いいのと同様だ。ぼくの頭にはある電話の呼出しのことしかなかったわけで、その電話は通話申込者の希望事項として交換局の西ドイツ専用交換機の前で女の子の声をもって用済みになるべき筋のものではなく、その女の子は申込者に待つようにと言って通話を切り、本局を呼んで言うのだ――ハンブルクをねがいます。ハンブルクを――そしてしばらくして回線のひとつを希望のあった接続コンセントに差し込むことができる、ぼくはそれをこの目で見たのだ、それは映画にも出てくる、どこかで東ドイツと西ドイツの間の電線がまとめられていて、それで電線は境界を越えてゆくわけだ。それに不思議はないだろう。しぶしぶながらぼくが付け足すのは非常識に回線数が少ないことで、これはしたがって耳に捉えておくことだってたやすいわけだ――接続された録音テープを想定してわれながら底意地悪いと思うこともできるだろう。ぼくがこれをともかくも言うだけは言っておいてわかってもらいたいと思ったのは、人が任意の平日の晩に長く待たなければならないということで、夜分でさえ、こうした通話をしようということになれば、そうなのだ――そして彼女は結局やはり交換局が彼女にどちらを伝えさせるか確信を持つわけにはいかなかったということなのだ――はいかしこまりました、かそれとも――どういうつもりなんです、か。それで待ち時間の後にこういう声を聞くのは信じがたい感じなのだ――ハンブルクが出ました、お話し下さい。これがすべてではない。幸いなことにカルシュのほうもまだ起きていた、かれは飲んでいたが、かれにはすぐ彼女の声だとわかり、訊きもしないでうんと言った。うん――とかれは言って、本来考えられぬものであり不可能なものであるその接続を切って、またしてもかれは境界線の彼方にいるのだった。きみは逃亡する男や朝しらむころの銃声についてのぼくらの誤解からぼくがどういう種類の正確さのことを言っているのか見て取れるだろう。ぼくが言うのは境界だ――隔たりだ――差違なのだ。

カルシュはハンブルクの町外れに住んでいた。しかしか

れは市内でいつも定った時間に郵便局と晩飯と喫茶店の間で連絡がついたし、旅に出るときはいつも消息を残していった。かれは戦後ある女優といっしょに暮していたということで、それはベルリーンでのことで、女は東の人間だった。どうやらかれらは別れるときに互いにこう言い交していたのだ――もしなにかあれば、自分はきみを忘れたりはしていないから、といった類のことを。というのも彼女がかれに電話をよこして来てくれと頼んだとき、かれは日をおかずに発っていったのだから。かれは旅立ちについても帰還についても消息を残していかなかった、二週間以上にわたる入国は許されぬことだったし。それでかれには連絡のつけようがなく、そしてその噂はまだおよそ強力ではなかった。

かれは間髪を入れず旅立って消え失せてしまったということで、そのころはまだかれの友人たちさえ信頼しきって電話機を引き寄せ、かれの番号を回して、最初のベルの音を聞きながら変ることなく確信していたのだ、かれは左手をタイプライターから離して無造作に送話器を取り上げて耳へ持っていくだろう、かれは書いたものから視線を離さないのだから（そういうかれを友人たちは観察する折があったのだ）――カルシュです。動ずる色もなく日ごろの調子で話を続ける図を想像する段になって、ところがこの想像図は二つ目のコールサインといっしょに生じて三つ目の音とともにくたびれてきたのだが、そこではじめて、かれの住居の思い出（そこでかれは机に向かって坐り、両手をキーから離し、電話へと視線を伴わぬ動きを見せたのだが）がすっかり解体してしまって、まるでかれの声はもうはじめから忘れてしまっていたような気がした。そうきみたちは言ったのだ、かれが二週間経っても戻って来なくて、きみらの電話が思いがけなく期待外れに終ったことが、きみらがかれに口に出して言うことはできなかったあらゆる警告が前もってわかっていたとおり事実となった証拠としてしか思い出せなくなった後で。

どんなぐあいだったのさ？

東ドイツの国境警察はもの慣れたおおらかな態度で回り道や寄り道をせずに旅の目的地（昔のガール・フレンドに会いに行きたいんです）を訪れるべきことをかれにさとした。またかれはその後でも帰路の他はその町の周辺を出てはならないのである。かれらはかれに無事走行を祈った――かれはかれらに快適な勤務を。かれはかれらのスポーツマンのような淡い微笑を理解した。その制服は映画をとおしてしか知らないものだった。

午後の埃と草いきれに包まれていくらか不機嫌にかれは引きつづきアウトバーンの東ドイツ側を走り
そして彼女の招待の意味をあれこれと思案した。かれは二、三年来彼女に会っていなかった。彼女はプログラムや写真を送ってよこした。かれは彼女に著書を送ることを忘れなかった。最近になってようやく彼女もそれに慣れてきていたらしかったが、かれは六百キロメートルの距離を隔てながら、その一日の経過についての消息を伝えたり、かれらが西ベルリーンのとある公園沿いの通りに家具付きの部屋を借りていた時代から共通に持っている友人たちについての対話を交したりする根気のよさを持ちつづけていたのだ——まるでかれらが同じ町に並んで住んでいて、比較可能な対象について同じ言葉を持っているとでもいわんばかりに。彼女の招きは事のついでといった調子のものだったし愛想もなくなにひとつ説明してくれるようなものではない。かれは重い黄昏の中で見慣れぬ車の間になに喰わぬ顔で停車して車を降りた。歩道は広々として、舗石が細かい頭を雨に濡れて暗い継ぎ目の中に並べ、大きな老木が半ば開いた蕾をつけていた。家の前面の重々しく煤煙で黒ずんだ化粧漆喰は、かれがもっと早く着いていたら、もっと明るく見えただろう。車のドアがばたんと締まる音はなお既知のものだった。それから現れたのはすべてこれ大理石の高い階段室で、清潔に使い古した絨緞の花道の延びる上にそびえていた。
彼女は窓を押し開けてかれが車を降りるのを見ていた。上から見るとかれの車は縦長の高級な外観を呈して、かれはドアの前で屈んでそれをロックしたとき別れを告げているように見えた。何歩もゆかぬうちにかれの歩みを停め、自分の滞在を許す書類をポケットの中にまさぐらせたその不信感を彼女は認めてがっかりした。かれはしかしあたりを見回したわけではなく、つかつかと乱れのない足取りで家のドアに向かった。かれは使い古しの家具の間に立って振り向いた。彼女は、かれの到着にふさわしい別室へ移ることに決めた。たちまち昔の相手を確認し合うさまはまるで互いに相手を忘れていたかに見えた。
彼女の部屋は、三十年も前から賃貸品になっている家具でいっぱいだった。彼女は研磨ワニスが引っ掻き傷だらけのベッドに横になって煙草を吸っていたのだ。通りに面した二つの窓は半開きになっていた。かれは再び振り向いた。彼女は框にもたれて両手で後手にドアを締めた。かれは彼女の顔の輪郭を自分の追憶と比較した。目ではなくてその周辺をなす眉が皮膚が筋肉の動きが表情を作るのだ。彼女が半ば向きを変えて襟足を示し堅い黒い髪の中に強引にせっかちに重ねて留められたクリップが見えたときはじめて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

彼女のなじみの面影がはっとかれを打った。二人は思わず知らずの素早い抱擁をその同じ呼吸が変らぬうちに解いた。「どうなの」——と彼女は言った——「飲物はなにがいい」

それは、昼間が実にひどい雨で台無しになった日のことだった。たしかにカルシュがやって来たのは立木のある狭い通りの大きな陰気な部屋や栗の花や二、三年前に錆びたバルコンの上で過した夏の幾晩かの思い出の故ではあった。あるいはまた万一のばあいの救助に関しての無責任なありふれた約束も思い出したのかもしれない、そんなことはあの時はバス待ちの行列の中で別離を縮めようというだけのものだったのだが。そういうことはまったく問題ではなかったのだ。彼女はアヒムにカルシュの話をしたのだった。その人を呼べよ——アヒムは言った。

第三週の終りにカルシュは後に残してきた友人たちに手紙で頼んだ——自分の住居をきちんとしておいてほしいし、ときおりは利用してもらいたい、それが使えなくなってしまわないように——まるでかれは電話もガスも電気もすぐ使えるようにしておきたくて、引き続き帰りを待ってもらうつもりでいるみたいにだ。かれとしてはともかくもこう言うことはできたわけだ——このことはきみらに伝えておいたぞ。その調子は落ち着いたもので、署名は疑いもなくカルシュのものだった。しかししばらくするとかれはまるで理解を絶する彼方に遠ざかってしまって、友人たちはもうかれのことを話題にする気もなくなってしまった。

いまやかれは当地にいて、どんな公共の場でも（路上で劇場で競技場で）彼女とアヒムの間に見受けられ、公衆はかれが仲間入りしている情景に慣れ、そういうものとしてかれを知っていた。くだけた態度で好奇の目を光らせて西ドイツ風にかれは二人に挟まれて浮れ調子の会話を交しながら歩き、客として訪ねて来たのであって、まる一週間滞在するつもりなのであった。かれがときには用心深く幸福そうに彼女の腕に触れ、朝はびっくりしたような微笑を浮べて彼女に挨拶し、暇乞いを忘れてもかまわぬではないか。かれが問題ではなかったのだ。なにか他のことを訊いてくれよ。

アヒムってだれなのさ？

カルシュはアヒムを知らないから、彼女はかれに自転車競技を讃えるある催しを見せた。彼女はホールの前はいやがってある脇道で車を降りたが、その後は高く広い光の下を臆する色もなく、もう入れてもらえない観客の群を突っ切って行った。一度彼女はうしろへ手を伸ばし、カルシュ

の腕を取って引き寄せたので、かれは半ば横を向いて彼女と並ぶことになった。回り木戸の手前で彼女はかれに目配せで注意を促したので、かれは守衛たちにお辞儀し、守衛たちは帽子に手を当ててカーリンの名前を呟いた。かれは彼女が入場のためにカードの類を提示しないのを見た。かれらはゴールライン際の仕切席に坐った。肘掛椅子が二つあいていたが、座席案内係は入口にすぐさま綱を引き渡してしまい、かれらのうしろに立ち止っている一般客のほうへせかせかと足を運んでいった。

走路はちょうどからっぽだった。巨大な空洞には幅広く弓なりに伸びる座席が鋼鉄の網目に懸り、その網目を照明燈が何倍にも複写した影にして、人の顔と空席でむきだしの背凭れとで編まれたまだら模様を描いて迫り上がる弓形曲面の上一面に拡げていた。まるく仕上げた木の走路と白い隔壁でできた楕円の輪を取り巻く下のほうの観客席は光をもろに浴びており、隔壁はその高さいっぱいに黒い文字で蔽われていた。カルシュは着席早々に自分の椅子をうしろへ引いていたのだが、選手控所のところでびっしり群がって明滅していたカメラマンたちの球状電光がぼろぼろと崩れて、ひとりひとり区別がつくようになりながら昇り勾配の走行路を渡ってゴールラインめざして進んで来たとき、カーリンがまたしてもかれの腕を摑み、その手を平らに拡げてかれの腕を撫でるように前へと滑らせたので、かれは中腰になって前へ乗り出した。何人かの報道記者は通り過ぎながらカメラをその肩から振り、円を描くように動かし、それが最高点に達したところでフラッシュが仕切席へと閃き、ほとんどそのまま歩きつづけながら下へ沈んだ写真機を引き上げた。「よう、カーリン」――かれらは、ときおり声を掛けていった。彼女は隣の男のほうを向いていた。拡声器から騒音が想像を絶するヴォリュームでがなり立てていたので、かれには彼女の言うことがわからなかった、かれは彼女の顔の丁重な（微笑を浮べた）動きに応えながら、がらんとしたよそよそしい階段室での自分の慎重なゆっくりした動作を思い出した。突然かれは彼女の言うことがわかり、吹奏楽器の発する騒音のつるべ打ちの中で彼女の声を聞き分けた、彼女がいまやその口全体を使って話をしていたからで、かれは前屈みになって唇を動かし、こうして二人はさまざまな視角からいっしょにプリント可能な画に納まることになった――女優Sの睦まじい語らい、相手の男性はアヒムではなかった、この謎は探り出せるだろうさ。音楽はこれでもかとばかりに反覆された。早くも選手控所からは自転車がゴールラインに向けて走路へと押し出されたとき、ゴール審判の仕切席にグレイの背広姿の三十歳くらいの若い男が現れた。競技司会者は新しいレースのアナ

ウンスをしているところだったが、マイクロフォンはかれの著しく増幅された話し声の背後にかすかに、明るいもの憂げな声の音響を不分明な呟きとして捉えていた。ゴール審判の仕切席の周りには動揺が生じ、拡声器の柱列がついにそのグレイの背広の男の声を雑音として桟敷席一面に振り撒いたときには、もうその動揺が広い走路を飲み込んでいた。喚声は想像を絶するものだった。驚嘆と喜ばしい安堵のあらゆる音声の総量が拡大されて丸天井から人間のものとも思えぬ感じで空洞へと跳ね返ってきた。次の発声は全員がいっしょだった、喉のうんと奥のほうでアヒムの名前の最初の音節を作り、その盛り上がりの後は精魂尽きて第二音節は沈下し、それがリズムを速めて追いかけっこし、第二音節が第一を蔽って重なり、第一は第二の中に包み込まれ、脚が大きく黒く書かれた文字の上のほうでぶらぶらと揺れ、打ち振られる腕が座席の横列を高く弾き上げ、喚声は足踏みとなって戻ってきた。背広の男は前に進み出ていて、両腕を広く横に伸し、それを頭上に持ってゆき、決然と胸の前に下ろし、ぴたりと止めた。痛々しいまでに静寂が拡がった——ひとりおごそかに吹奏楽が音響柱列へ戻ってきて、司会者の声を受け容れる土壌を柔らかくほぐし、司会者の声はうわずって揺れながら到来者を歓迎した。写真報道の記者たちは前屈みに平らな斜面をよじのぼっていった。カルシュは視線を斜めうしろへ向けた、いまカーリンの隣で息もつかせぬお喋りが気になったからで、彼女の隣にはだれかがマイクロフォンの上に屈み込むように坐っており、その長髪はエレガントな黒眼鏡の上の縁のところへ垂れていて、かれの上半身は手にしたマイクロフォンの動揺につれてびくびく動き、声量は上がり、あいている片手はホールのほうへ突き出された。カルシュはその弁舌から親愛の情を聞き取った。前例のない栄誉がアヒムの三十歳の誕生日のために準備されました、歓呼の声はホールを満たしております、その文章は途切れ、かれは飛び上がり、喚いた、カルシュはまた反対側を振り向いた。競技主催者席の周辺はいまや黒のスーツで埋められていて、その隙間にかれは、おぼつかない一本の手の上に屈められたアヒムの顎を見た。その手はかれの上着の折り返しのところになにかを着けているところで、花を持った白いブラウスの子どもが黒いスーツの群に殺到し、大衆の歌声の背景に吹奏楽がかすんでいた。やたらに高い鋭角カーヴの岸辺からひとつの多声の言葉が忘我の跳躍をして仕切席へ落下し、幾重にもなって跳ね返り、その言葉はけたたましいリズムになって砕け散った。これをメモするならグラフ形式が一番だろう。マイクロフォンの男はいつしかカルシュとカーリンの間に割り込んで安楽椅子の肘掛の上に陣取っており、

支えた腕で集音器を雑音のより密なあたりへ高々とさし伸べ、その一方でカーリンと落着き払った問答を交していた。その間にアヒムは競技主催者席のテーブルを越えて走路に降り、色鮮やかなトリコを着たひとりの自転車レーサーが競技用自転車を肩に駆けよってきて、それを下ろし、片腕をアヒムの肩にかけ、笑い、なにか言った。ひざまずく写真リポーターの激励の掛け声がアヒムを取り囲んでいたから、五メートルの距離でなにひとつ聞き取れはせず、マイクロフォンの男はあっと驚くひと跳びで桟敷席からびゅんと風を切って飛び降り、宙を駆けながらくねくねのたうつ回線をうしろに引きずってゆき、自転車の上のアヒムはかれの突撃を受けてよろめいたが、かれはアヒムを抱き締め、マイクロフォンを高く突き出し、喚いた。かれの声は途切れ、下から写真機のフラッシュが閃き、その間にも屋根組の照明燈はそのグループの上で大きな光の輪をいくつものろのろと押し付け合っていた。アヒムは差し伸べられた手に向かって謹厳に注意深く語り、暗色の眼鏡に見入り、考え込むように首をかしげ、アヒムの周囲は騒音の強大な丸天井の下でかちゃかちゃ鳴る破片のちっぽけな塊のようにうごめいていた。かれらは未練がましくかれを解放した。アヒムは横手の桟敷席の一円のほうを向き、カーリンを見付け、微笑んだ。（それはかれの骨張った顔の中でやさしい動きとして際立って見えた。）かれは肩をそびやかし、それを下げ、唇を突き出し、途方に暮れ、顔をそむけた。その程度に陽気にかれはハンドルに身を支え、足を踏んばり、車を押してもらい、グレイの背広でネクタイをして明るい茶の短靴で巨大な走路を隈なくまわりはじめた。何度も何度もかれは右手で花束を、楕円形のカーヴを描いてかれとともに進む朗らかな喚声のほうへ差し伸べ、破顔してその高名な自転車レーサーの顔に白い歯を見せた。カーリンの高さのところでかれはほとんど目を向けるでもなく花を桟敷へ投げ込み、つと振り返ってカルシュを見、軽く手を挙げてうなずいた。カルシュはうなずいた。それからかれは先へ進んだ。かれらはたちまちのうちに外へ出ていった。カーリンがカーネーションを捉えたとき、喝采はいま一度高く盛り上がっていた。

どうしてさ？

なにしろ彼女は顔が売れていたから。彼女の姿は通りで目についた、というのも彼女は舞台で見られたから。彼女はしょっちゅう市の催し物で見かけられ使われていたから、彼女はそういうことには付きものなのだとも考えられて、他の都市と比較してのこの市の目印ということが問題にな

ると市民の話題にのぼるのだった。だがそれ以上に彼女は思い出の絵姿で立居振舞の規則書といってもいい存在になっていた、というのがいくつかの劇映画のおかげで、それらの映画で彼女は最初ひろいスカートを着けた娘として登場し、その娘は片意地で、無器用なやりかたで情があり、世間を理解せず、説明してもらいたいとも思わず、それでいながらまったく思いがけなく類のない心やさしい身振りになってしまうのであって、それというのもすべてがまるで違っているからなのだった。この人物はいかにも心ならずも泣き出すことができて、そうなるとどう慰めたものか見当もつかず、人間からその慰めがくることはなかったが、陽の降り注ぐ下での大がかりな飾り立てられた出来事からとなれば話は別だった、そういう出来事には実に多数の人が関与していたのだから。髪は結わず田舎風にサンダルをつっかけスカートをゆらゆらさせるときなど、この演技者はいかにももっともらしく喜びを顔の表面の動きに移し換える能力をもっていた――『あの女はどえらく光って見えることがあるんだ』、これは思い描いてみることができた。しかしたいていの手紙はこの前の映画の後で彼女のところへ来るようになったもので、その映画では彼女はタイトのスカートでしなやかに意地悪く、誘惑に乗る隙を持つ学者の反国家的な妻を演じたので、ここで彼女は人間というものがいかに悪くありうるか、そして、わけ知りの善意の人人の説得にたいしていかに大ブルジョワ的にかたくなに心を閉しうるものかを演じて見せた――脚本はしかし彼女に四歳の息子を添えていて、その息子を相手に彼女は母親らしく戯れ、日向（ひなた）の緑の草むらに坐っていた。彼女は超然とした物腰を示すことができ、またいそいそと世話を焼かねばならず、それで頑冥（がんめい）から思いがけなくとはいえやはり期待どおり結局は大いなる輝きがあふれ出てきて、彼女は人生をあるがままの姿で知っている女に見えたのであり、しかもあの若さだからきみを理解してくれるし、助けてくれるだろう、恥しがることはないよ、手紙を書いてみろよ。（というふうな話をカルシュは聞かされたのだ。かれはこれらの映画を見ていなかった、というのも彼女はすぐにこう言ったからだ――行かないでよ。あなたには絶対に見てもらいたくないの！）人は通りで彼女を呼び止めてアヒムへの挨拶を彼女に託し、なぜ賢明な奥さんがその夫をやはり結局は国を捨てぬよう引き止めるのかと訊ねられた、最後にはすべてを悟らなきゃならぬものですかね、ほんとうに？　そしてカルシュが彼女と並んで立っていたときのことだが、彼女はある靴屋で胸をはずませている娘たちに髪の毛を彼女そっくりに結い上げようと思えばどうすればいいかを説明した。それから菓子屋では二人のばあさんが彼

女を階段で行き会った隣人のような長い会話に引き込んだ——バターのこと、カーリンの清潔な肌のこと、西ドイツのことや、腕に抱いてゆける小さな犬のことについて。一方がいつも他方の口を封じてしまうのだが、こちらのばあさんは実はあなたの沢山のお金のうちからちょいと施しをしてもらえまいかと頼みたかったのである。彼女は人気があった、『あれはのぼせ上がったりしてないわ、彼女はほんとに人間的よ』彼女の名は売れていた。

しかしアヒムは有名であった。かれからはなにひとつ望みようがなかった、なにを頼みに行きようがあったろうか、かれにはもっと大きな仕事があったのだ。かれの生活は彼女に較べて目につかなかった。自転車レーサーのトレーニングについてカルシュは一般にこんな意見が口にされるのを聞いた——休む間もなしで、比較を絶するきびしいものなのだ。だからかれが自転車競技の記念式典に半時間も留っていたのは不可解で、かれはそのために自分の誕生日を放棄したのだが、それはかれにはなんの実入りももたらさなかったのであった。かれの名声は私欲のないもののようであった、というのもかれの勝利はかれのものではなかったのだ。それらの勝利を可能にした業績は想像を絶していた。『どうやってあいつが十年間それをやり遂げたのか、おれにはできないことだ』——国家をあからさまに称揚し、勝利に満ちて西方の外国から帰還するたびに、かれという人物も同じようにはるかな彼方へと遠ざかっていき、それでかれこそは本来の手本であった——かれには異議の申し立てようがなかったのである。

カルシュはそこでなんの用があったのさ？

いささか気むずかしい顔を昼の冷たい明るさにさらしてカルシュはとある広い人気のない広場の片隅に立ち、主要な交差点の道路交通を観察していた。信号燈の色は自動的に変るのではなくて、歩道の頭上にある木小屋に坐った白帽子の警官によって操作されていた。カルシュはしばらくかれが切替え操作するのを眺めていたがそこにはなにも見るべきものはなくて、その整理係がマイクを通じてひとりの年老いた女が信号の光を間違えて車道を走り渡ろうとするのを呼び戻したとき、カルシュは係官がその高い所から下にいる女に向かって切替操作や目配りの合間に言わねばならなかったことを聞き取り、かれはそれを理にかなっていると思った。かれだってそういう表現をしただろう、ただかれはそんなふうに呼び停められたくはなかった。「そのグレイのスーツの若い女の人！」と警官は叫んだ。そのグレイのスーツの女はぎくりと二歩後退してまた向う側の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.